Architectural Institute of Japan

BACKYARD

「光と影」から「曲り角」へ

在塚礼子 埼玉大学教育学部助教授
❖REIKO ARIZUKA

100を超える特集テーマの候補の中から「キャンパス計画」がとりあげられたのはなぜだったのだろう（そんなことをいまさらいうのは無責任のようだけれど）。専門家というわけでもなく，もっぱら個人的な体験に端を発した提案に，思いのほか多くの支持が得られて実現に至ったのは，いろいろな条件が重なったためである（何かが実現するのはそんな時であるには違いないが）。

そもそも，大学キャンパスの計画や設計は大変に魅力的なテーマである。特集のテーマとするに足る多くの蓄積もある。ところが案外なことに，このところしばらく特集されていないようだ。秋の本会大会が東京都立大学の美しい新キャンパスで開催され，そこでキャンパス空間をテーマとした協議会も開かれる。協議会は盛り上がったところで時間切れとなることが多いので，それを発展させるのもよい。――これらが支持を受けた理由だったろう（比較的コンパクトにまとまりそうなので，特集ページ数の少ない今月号向きという判断もあったようだけれど）。

しかし，そういったことにも増して実現の力となったのは，個人的と思った私の体験が，大学に籍を置く人の多くに共通する体験だったことである。移転や再開発をめぐるさまざまな葛藤に，建築を専門とする学科や個人は無関係ではいられない。この体験は，さまざまな大学改革の動きがはじまっている中で，さらに多くの人のものとなることが予測された。

この一年間の，私にとっては降って湧いたような，所属する学部の建替えをめぐるできごとは，“いいキャンパスの実現など夢のまた夢”のように感じられるものだった。これまで建築誌や作品集を彩ってきた大学キャンパスの名作，そこからイメージされるキャンパス計画というものと，自分のしていることや置かれた状況とのなんというギャップ。そのギャップを何らかの形で埋めてみたいというのが提案の発端だったように思う。

そこで，最初の仮タイトルを「キャンパス計画の光と影」とした（使い古されたフレーズは我ながら不満だったが）。大会の協議会はキャンパスの外部空間に焦点を絞ったもので，美しい風景庭園としてのキャンパスは論じられても，長年にわたる，さぞ大変だったに違いない合意形成のプロセスには触れられなかった。特集ではむしろ，美しさの背後の，“どろどろした”計画の側面をとりあげたいと思った。それをどう克服すれば美しさがもたらされるのか。

また，都市または地域社会とキャンパスの関係や，時間的変化への対応の問題も，示唆されながら十分論じられなかった重要なテーマと思われた。前者は，高齢化社会を迎え，生涯学習時代に対応するためのテーマでもあるし，後者は，新設・移転から再開発の時代を迎えている現在，以前にも増して重要に思われたのであった。これらの二点の重視が，今回の編集方針となった。前者については，住まいをいかに計画に組み込むかの問題，後者とからめてはマスタープランのあり方を，もう少し盛り込みたかったが。

もうひとつ，最初の目次案には“国立大学の惨状”という項があった。提案者の実感はこもっていたが，昨年末マスコミにもとりあげられ，ともあれ基準面積の改定もあるとのことで消すことにした（ところが結果的に“ゲストルーム”で有馬先生が話題を広げつつ，的確に補ってくださった。ありがとうございます）。

最後まで決まらなかったのが，特集のタイトルだった。話題の多さにひきずられた「キャンパス空間の計画と生成」などという，硬くて焦点のぼけた案には編集委員会の賛同は得られず，つけていただいたのが「キャンパス計画の曲り角」である。そこに視点を絞って進めてきたわけでもないので，やや違和感を感じたが，他に名案も浮かばない。そうこうするうちに，だんだんに渡辺委員会らしい文学的なタイトルだと思えてきて決心したのだった（全体を通して，編集委員の中の専門家である上野淳さんには，大いに助けていただいた）。

それにしても，ほんとうに，いい建築を生む条件はなんと整っていないことだろう（これは，大学キャンパスに限ったことではなく，また，実務にかかわっている人ならいつも経験し，それと闘っているに違いないが）。計画のために制度化されているシステムの問題は大きい。けれども，そのこととともに痛切に知らされたのが，建築を専門としていない人々の建築観だった。建築に何ができるかについて期待していないというか，いい建築のイメージを持っていないというか，ともかく，1 m²でも多い専用面積を獲得する以外の目標を持ち得ない状況に置かれてきたようなのである。これは，最低条件も満たされていない“惨状”の中で培われたものであるとともに，一般に建築を語る文化が育っていないことにも起因し，さらに建築家への理解や信頼のなさともつながっているように感じられた（残念ながら全面的な反論は難しいが）。

しかし最終的には，キャンパス計画にひき戻せば，どのような大学をつくりあげようとしているのか，その哲学，理念，理想を追究することが最も肝腎なことなのであろう。昨年の本誌10月号の，サレジオ学園をつくった人々の言葉は，そのことを再確認させてくれて感銘を受けた（これもまた私立大学よりも国立大学で語るのが難しいことに感じられるのだが）。

この特集の発端となったできごとが最初の山を超え，すっかり消耗して，会う人ごとに心配されてからちょうど一年。多くの人のエネルギーを投入してつくりあげ，つくり直した計画の実現への道はすっかり細くなって，まるでなにごともなかったような日々が続いている。この“裏庭”でひとやすみして気がつくと，そのころ急速に，5歳分は進んだように思えた私のagingも，3歳くらいはもとに戻ったように感じられる。

さて，できあがった2月号を，この“裏庭”の陽だまりのベンチに腰かけてゆっくり読んでみよう。そして，まだ継続しているはずのそのできごとの次のステップに生かしていこう（これでは全く自分のための特集だったようだけれど）。

1948年東京都生まれ／日本女子大学卒業／東京大学大学院修了／建築計画／工学博士／著書に「老人・家族・住まい」ほか

NII-Electronic Library Service